

湖沼战区大江賢次

湖沼戰區

大江賢次

昭和十五年十月十日印刷
昭和十五年十月十五日發行

區戰沼湖



定價壹圓七十錢 ㊦

著者 大江 賢次

東京市日本橋區通三丁目一番地

發行者 河 出 孝 雄

東京市板橋區板橋町三丁目六十四番地

印刷者 石 川 正 夫

東京市日本橋區通三丁目一番地

發行所 河 出 書 房

電話日本橋一七四八番
振替東京一〇八〇二番

帝都印刷株式會社印刷

裝
幀
落
合
登

湖
沼
戰
區

大
江
賢
次

短篇集叢書

山本和夫 一莖の葦

價一・五〇
千一四〇

芹澤光治良

若き女の告白

價一・七〇
千一四〇

林房雄 霧と白樺

價一・五〇
千一四〇

北川冬彦 古

鏡

價一・七〇
千一四〇

間宮茂輔 石榴の花

價一・七〇
千一四〇

大江賢次 湖沼戦區

價一・七〇
千一四〇

岡田三郎 郷

愁

價一・七〇
千一四〇

宮本百合子

その年

價一・七〇
千一四〇

上林 曉

野

價一・五〇
千一四〇

長與善郎 幽

明

價二・〇〇
千一四〇

壺井 榮 祭

着

價一・七〇
千一四〇

美川きよ

新らしき門

價一・五〇
千一四〇

藤澤桓夫 赤い月

價一・五〇
千一四〇

宮内寒彌

秋の嵐

價一・七〇
千一四〇

和田 傳 草

原

價一・七〇
千・一四〇

中村地平 小さい小説

價一・七〇
千・一四〇

福田清人 生の彩色

價一・七〇
千・一四〇

荒木 巍 女の手帖

價一・七〇
千・一四〇

湯淺克衛 怒濤の譜

價一・七〇
千・一四〇

岩倉政治 若い世代

價一・五〇
千・一四〇

伊藤 整 祝

福

價一・三〇
千・一四〇

井伏鱒二 鸚鵡

價一・五〇
千・一四〇

近松秋江 浮

生

價二・〇〇
千・一四〇

坪田讓治 村は晩春

價二・二〇
千・一四〇

張赫宙 愛憎の記録

價一・七〇
千・一四〇

上田 廣 りんぷん 戦話集

價一・五〇
千・一四〇

丹羽文雄 或る女の半生

價一・七〇
千・一四〇

太宰 治 女の決闘

價一・五〇
千・一四〇

岩倉政治 冬を籠る村

價一・四〇
千・一四〇

目次

湖沼戦區

秋立ちぬ

後送部隊

二つの夜話

北の蜜蜂

おしん婆さん

一

七

七

101

101

101

愛

一八二

乳房の賦

一八五

小夜曲

二〇二

いざよひ

二〇四

貧しければ

二〇六

湖
沼
戰
區

(南
昌
前
線
記)

……暑い。

身のおきどころがないほど蒸暑い。〇〇飛行場の、地上整理員たちのテント脇からみはるかすと、並んだ航空機の波のうへに陽炎がゆらめき、ずつと彼方のぐるりを取巻く夏草のみどりが萎びてまつ白だ。

「南昌方面は目下豪雨ださうですから、出発は午後一時まで見合えます——」

航空司令からの發表を疑ふほど、こゝの空はにくりしいほどの快晴である。

仕方がない。絶えずながれる汗をぬぐひながら待合室へ遣入つた。北支から背負つてきたリ

ュックスの整理をはじめ。秤にかけてみると十三キロあつた。これでは飛行機に便乗する規定をはるかに越してゐる。どれを捨てようか。どれも惜しい。みんな熱河からはじめて北支と蒙疆をへめぐつた品々だ。山西の奥地で同行の立野信之君に、裾わけをしたドロップスの罐。前線の兵隊さんにあげようところまで持つてきた羊羹と栗きんとんの罐詰。雑誌と單行本六冊。原稿用紙とノート。それらを土間に出してゐると、

「紙がいちばん重いですね」と、南京から一緒になつた川端龍子畫伯が、これまたリュックサックからスケッチブックを出して、小首をひねつたあげく不用の部へ置いた。

「これはいいですよ。商賣道具だから、無理してでも……」と、海軍の係の方がスケッチブックを押しやる。

「兵隊さん、これは南京での戴きものですが、皆さんで飲んで元氣をつけて下さい」と、鶴田吾郎畫伯はウキスキーの壘を出す。

係の兵隊さんたちは、氣の毒さうな表情の中にほゝゑみをうかべて、いいですかあ、なんだか悪いなあ、なあ？ と隣の戦友にいふと、そのゴマひげが天神なりに生えた飛行服の戦友は土間に私たちへ背をむけてしやがんで、かまぼこ鰯の雛とあそび戯れてゐたが、
「なあが、あたる、どうしたもんやろなあ？」と、鰯の雛へむかつてきいた。

やつとこさで歩けるやうになつた鰯の雛は、育ての親にさう訊かれると鳥渡思案がほに黒い首をかしげ、へうきんであどけない瞳で物怖ぢもせず一同を仰ぐと、突然、例の愛嬌のない聲でギヤツ、ギヤツと鳴き、さしのべた掌へばつと羽撃いてのつかつた。そして、機嫌でもとるやうに、陽にやけて靜脈のういた腕をつゝいた。

私たちは手をやすめて覗きこんだ。

鵲の育ての親は、眼尻にいつばい愛情をよせて腕をのばし、

「どっこい、どっこい——」

あぶなつかしい足どりで肩をめざすのを、鵲の稚い一步ごとに調子をつけてやつた。すると鵲は鵲で、その都度、ギヤツ、ギヤツと噎れた答へをかへし、汗のにじむ腕をしだいに攀登つてゆく。つひに肩へたどり着いた。鳥の本能なのであらうか、飛ぶことを教はらずに育つた鵲の雛は、それでも高みに來ると二三度かはいゝ翼をひらいたが、飛びもせず、屁びり腰から姿勢を背のびに變へて、これはまあ、育ての親のひよる毛の生えた耳のあなへ、長くてするどい嘴を入れて啄木鳥きつねどりを真似た。育ての親はくすぐったいのかゴマひげが少し吊り上り、口をへの字にしたりつの字にしたりして、

「ふム、ふム、さうか、ふム、ちあさうしよう。え……？　なに、ふム、ふム」と、さゝやきに答へるさまが酒脱である。

みんなはどつと笑つた。が、鵲の主はしごくまじめに、

「戴けつてが、あたるは云ふのや」と、云つてしまつてから、「ははつ」と活潑にわらつた。

白い健かな齒ならびに和して、黒い嘴をひらいた鵲の雛は、赤い可憐な舌をうごかして又鳴いた。

きけば飛行場のそばの楡の梢にある巢から、親鳥がどうしたのか死んで屍になつて落ちてゐるのをみつめて、雛を救ひだして飯つぶで育てゝきたのだといふ。どうしてが、あたるなんていふ名をつけたのです、と訊けば、「ががああ鳴くんやもんで、それでがあたりです」と、しくあつさりとしてゐる。

「ぢあ、つまりこの鵲の雛つこは太郎といふからには、雄なんですな」

「さあ……雌やとやきもきせんならんから」

又、私たちは笑つて汗をかいだ。

空では編隊で、ものすごい低空飛行をしてゐる。待合所の上を掠めるときには家全體が顫へる。つぎつぎと空の勇士たちが猛練習の交代に、いつもと同じ穩かな足どりで出たり入つたりしてゐる。草原の上に腹這つてハーモニカを吹いてゐる兵もゐる。彼は『満洲娘』を首尾よく完うしようとするのだけれど、二節目でどうしても躓くのである。根よく最初から吹きなほし、まだ若い頬の横顔だ。私はそつと近づくと、並んで腹ばひになつた。彼は、ちよつと羞ん

だ。その證據に第一節でもう躓いた。まるまづちい鼻に汗のつづが懸命だ。

「えい、こいつめ！」と、宙で振つて濕りを拂ふ。愛機ほどにいふことをきかぬこの小さい樂器。宙で振ると、メッキのはげたハーモニカは、あはれな聲で顫へる。私がだまつてほゝゑんでゐると、彼は鼻の頭の汗をぐいと手の甲で拭つて、呟くやうにいひわけをした。「まだ先週から稽古をしたばかりだもんなあ。うまくやれんと毀したくなるし、毀せば吹けんし……ふふ、をかしなもんですな」

若い整備兵は、鼻をこすつたときについたマシンオイルで、片髭だけびんと鮮かな大將になつた。油が、と教へると草をむしつて無造作にぬぐひ、こんどは草のみどりが仄かに残つた。

ハーモニカをあきらめて草の上に仰向けにひっくり返つた。莖を出すと、「こゝは禁煙です」と、まぶしげな眉が吃と咎めた。藍をぶちまけた熱い空に、戦闘機が~~死~~になつてゐる。大氣をあぐる爆音が金屬性の音をたてる。ぢつと凝視してゐると眼が痛くなつてくる。草いきれの中に、若い整備兵は何と思つたか、こりやいけねい、と叫んでむくりと起上つて、拳で自分の頭を小突いた。いぶかると、野胡麻の白い豊かな花を折つて、指でくるくると廻しながら、

「ひっくり返ると眠つちまふ！」と、彼は、自分を叱りつけるやうにいひ、花のついた莖をち

ぎつた。

しばらく黙つてゐると、ふいに、

「漢口の鳶はなかなか伶俐ですぞ」と、いふ。

私が呆氣にとられてゐると、彼は、この飛行場附近にゐる鳶の群は、最初のうちは飛行機に恐れをなして、漢水に向ふ側へ遠のいてゐたのだが、鳶のやうにべつだん危害を與へぬことを見きはめると、ふたゝび舞戻つてきて安住の空にきめた。そのうちにいはば見様見真似で高等飛行の戦闘形態をやりだしたといふのだ。じつさい巧くなつて、四五羽が入り亂れて器用な拋物線をゑがくさまは、相手が鳥だけに——彼のことばで云へば——「あつぱれ上出来」である。私は、その珍しい鳶の業をぜひ見ようと一心に瞳を凝らしたが、蓮のしげる沼の上の鳶の輪は悠々閑々、地上の期待へそつぽを向いてゐた。……

飛行場にはこのほかに仔猫が二匹飼つてあつた。これもまだ生れて間もなく、澄んだ瞳にはまだ智慧もつかず、きよ々とんどけいなおもさがしが皆の愛を招き、かはるがはる逞しい掌で兄弟はそだち、昨今は玉をとる爪さばきもたくみになつた。この仔猫たちは皆のベットなのだ。誰がつけたのか、恐らく漢口の町で買つた赤い絹紬けんちゆうを太い指と小さい針で縫つたものだら